



一般社団法人 **日本LD学会**
Japan Academy of Learning Disabilities

会 報 第121号

一般社団法人 日本LD学会 事務局（業務委託先）

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター（株）国際文献社

URL <https://www.jald.or.jp>

- ・巻頭言：子どもに「寄り添う」とは
- ・文部科学省 令和4年度予算の概要
- ・厚生労働省における令和4年度の発達障害者支援施策
- ・〈連続講座〉新学習指導要領時代における学びの多様性を生かすための一貫した支援
- ・〈連続講座〉日本LD学会研究委員会
- ・委員会リレー企画 アクセシビリティ委員会とは
- ・第6回 Association for Reading and Writing in Asia 年次大会 (ARWA 2022) 参加報告
- ・PATIO ～実践の最前線～



子どもに「寄り添う」とは

宮城学院女子大学

梅 田 真 理

今年も教員採用試験が近づき、本学でも教員を志す学生がエントリーを始めている。志望理由や目指す教師像の欄には、各々が教員を目指した理由や各自の理想の教師についての考えを書いている。その中には、毎年、「子どもに寄り添う」教師でありたいという文言が多く登場する。この「寄り添う」とはどのような教師のあり方を示すのだろうか。

「寄り添う」ためには、まずは相手のことをよく知る必要がある。寄り添うべき相手はどんなことを欲しているのか（ニーズがあるのか）、またどのような方法がその人に合うのか、そういったことを知らなければ相手が求める寄り添い方はできないだろう。もちろん、そばにいてくれるだけでよい、あるいは少し離れたところから見守ってほしい、などニーズは様々であり、だからこそ相手を「知る」必要がある。

では、私たちは寄り添うべき子どものニーズを十分に知っているのだろうか。子どもによっては、うまく話せない、コミュニケーションが苦

手、自分自身の困りを認識しにくい場合もある。そのような子どもたちの真のニーズを把握するためには、やはり丁寧に時間をかけて子どもと付き合うことや、他の支援者と共に「この捉えでよいのか」という検討も必要だろう。そうして、常に独りよがりな捉えになっていないかを確認することが大切である。

子どものためにという思いが強いと、ともすれば支援の目標が自分の目標にすり替わってしまうことがある。「こうしたい」「こう育ってほしい」というのは、あくまでも自分の思いであって、子どものニーズとはいえない。このことを理解し、子どものニーズに沿った支援を検討すべきだろう。以前、当事者の方から、「熱心な支援者ほど、自分の思いを押しつけてくる」という耳の痛い話を伺ったことがある。このように思っている、伝えられずにいる場合も多いだろう。「寄り添う」ことは相手を尊重することが基本であることを、忘れずにいたいと強く思う。